

われら地球人 NPO・NGO 奮闘記 第1回

異文化を理解、 尊重した支援活動を

世界を舞台にさまざまな活動に取り組んでいる日本人がいます。この連載では生活環境や文化、考え方の違いに悩みながら、奮闘する彼らの姿を紹介します。

1 回目は紛争地帯などで支援活動を展開する NPO 法人 JEN の若野綾子さんにお話しいただきました。



わか の あやこ 現在、プログラムオフィサーとしてハイチやスーダンも担当

認定 NPO 法人 JEN 若野綾子さん

中高生のころに見た内戦や紛争に関するニュースをきっかけに国際支援活動に興味を持ち、大学を卒業後、卒業論文の調査で知った JEN のインターンになりました。

インターンは1年間で、そのまま JEN に就職できるものではありません。私の場合、インターンが終わ

るころ、アフガニスタン駐在の經理・総務担当者の公募があったので、運よく職員として採用されました。

準備期間3カ月でアフガニスタンに出発したのですが、両親は大反対でした。ただ、両親に赴任を知らせたのは出発の2週間前。最後は振り切って出発してしまいました。

アフガニスタンからスーダンに移って、合計4年間の海外赴任。昨年からは東京で勤務しているのですが、両親としては「やれやれ、やっと帰ってきたか」という感じのようです。

国際支援＝力仕事？

友人などに「海外で井戸や学校を建設する支援活動をしている」と話すと、私がスコップを持って井戸を掘っているようなイメージを持つようなのですが、実際は違います。

JENの場合、海外事務所に日本から赴任する国際スタッフは各2〜4人程度。個々の支援事業を現場で推進していくのは、英語と現地語を話せる現地で雇ったスタッフになるのですが、その現地スタッフがスコップを持つわけでもありません。建物などを建設するのであれば現地の専門家を頼みますし、事務作業であつたら現地の人を労働力として雇っています。

つまり、国際スタッフの仕事は、支援事業の立案や資金支援者に対する事業報告、資金の管理、そして現地のスタッフが主体となって事業を維持運営していけるように指導をすることが中心なのです。

ルールの違い

日本から来た私と現地スタッフの

間には考え方などにさまざまな「違い」があり、当初はとても苦労しました。

休暇申請や勤務時間といったルールは当たり前のように守ってもらえない。どう見ても自分で書いたとは思えない領収書が出てくる。仕事をする上で理解できない彼らの行動に不信感を募らせてしまいました。

実は、現地では文字を書けない人が多く、商店で領収書を書いてもらえないため、スタッフが自分で書かなくてはならなかったのです。ルールを守ってくれなかったのも、スタッフの多くが、紛争のため義務教育を終えておらず、「時間を守る」といったルールを学んだり必要とされる機会が少なかったことが原因でした。

そうした現地の事情に無知なま

ま赴任してしまった私には、彼らを信頼して仕事をするのがなかなかできませんでした。

もちろん、日々やりとりを重ねていくうちに、お互いの考え方やルールに対する理解が深まり、信頼して



JENが南部スーダンで掘った井戸に水を汲みに来た子どもたち

働くことができるようになりました。アフガニスタンでの2年間は、現地スタッフとの「違い」を受け止め、距離の取り方や、彼らの意欲を高めるようなアドバイスの仕方などを勉強する日々だったと思います。

制服姿の女の子たち

生活環境や考え方などの「違い」もあって、支援事業が計画通りに進むことはとても稀なことです。

その分、事業がうまくいったときの達成感は何物にも代えがたいものです。中でもアフガニスタンのカブールで2001年に行った、識字教育事業は特に印象に残っています。

事業は、丘陵地帯にある経済的に困窮している地域の女性と子どもが対象。教育を受けても仕事に就けるわけではなく、また保守的な考えか

ら、特に女の子への教育には消極的な地域でした。

プログラムは1年間、日曜日から木曜日まで毎日2時間という厳しいもので、教室にモニタリングに行く先生がいなかったり、子どもが少なかったりすることもあり、不安に思うこともありました。

事業が終わるとき、子どもたちに「この後、勉強はどうするの」と聞くと、「この後は学校へ行く」と言っていたのですが、親が学校へ行くことを許してくれず、学校の代わりに識字教室に参加していた子どもたちです。彼女たちが本場に普通の学校に編入できるかどうか不安でした。

ところが事業終了後たまたま近くまで行ったとき、その丘の上から全身黒い服に白いスカーフという格



井戸やトイレの管理方法についての話し合いの場

好をした子どもたちが下りてくるのが見えました。黒い服に白のスカーフは現地の女の子が学校へ行くときの服、いわば制服です。つまり、親が子どもの、女の子の教育の必要性を理解して、学校へ行かせてくれる

ようになったのです。

その光景を見たとき、小規模な事業だったのですが、本当に取り組んでよかったと思いました。

自立を支えるついでに

日本に戻り、東京本部から事業を管理する立場となって、改めて考えることがあります。必要な支援を必要な期間、適切な形で行うために、どのように事業をデザインし、そのための資金を調達していくか、ということです。

JENの事業は災害や紛争に巻き込まれた人々を元気づけ、自立を促すことを目標としたものです。現地の人々の参加や意識の変化を必要とする事業ですから、中長期的な視点で事業を計画することが重要だと思っています。

より良い支援を行うには、彼ら私たちとは全く違う文化に生きていることを理解して、尊重する必要があると思います。いかに現地の人々が主体的にプロジェクトの目的を理解し、課題の克服のために活躍できるかがプロジェクトの成功には不可欠です。決して単純化できない支援のプロ

セスと、そこから生まれる「自立」の重要さを、日本の支援者や一般の方々にお伝えしていくことも自分の役割ではないかと思っています。

(取材・構成／本誌編集部)

認定NPO法人 **JEN** (ジェン)

1994年設立。「戦争や災害で失われた生活の再生を支援する」をモットーに、アフガニスタンやイラク、スーダン、パキスタンなどにおいて、生活インフラ再構築から自活支援、心のケアを行う。

スタッフ構成

国際スタッフ(本部事務局14人、海外事務局11人)
現地スタッフ104人

加盟団体

ジャパン・プラットフォーム (JPF) NG
Oユニット正会員／国際協力NGOセ
ンター (JANIC) 理事／日本NPOセ
ンター正会員

連絡先

〒162-0824
東京都新宿区揚場町2-16
第二東文堂ビル7階
Tel.03-5225-9352